九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 十五、六世紀におけるドイツ都市市民の階層化について

今来，陸郎

https://doi.org/10.15017/2338993

出版情報：史淵. 46, pp.45-75, 1951-02-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

# 十五、六世紀におけるドイツ都市
## 市民の階層分化について

今来陸郎

一、序　言
二、市民一般の階層分化
三、手工業者の階層分化
四、むすび

### （一）

近年におけるヨーロッパ中世都市の研究において一時期を劃する業蹟として、マックス・ウェーバー晩年の雄篇「都市」[1]を挙げることは、恐らく何人にも異論のない所であろう。すなわちヨーロッパ中世都市は、ウェーバーによつて、社会学的な考察を通して、古代都市及び東洋都市との対比という世界史的視野において、美事に把えられたのである。

ウェーバーによれば、古代都市が奴隷の抑圧と掠奪という軍事的契機によつて成立したのに対して、中世都市は封

建領主や騎士の軍事的権力によつて成立し、あるいは時によつて商人自体の独立の軍事勢力をもつことはあるが、しかしその軍事勢力は都市の組織の基礎となつたものではなく、都市の経済的発達の保障たるにすぎなかつた。中世都市の唯一の対象はあくまでも平和な営利行為であつたとすべきである。したがつて中世都市は、一応安定した社会秩序の成立を前提とする経済団体として成立する。その点で外見の相似に拘わらず、中世都市は古代都市とは全く意味を異にする社会団体であつた。さらに中世都市の著るしい特性は自治的行政をもつ公共団体（Autonome Stadtgemeinde）であつた点にあり、かゝる自治的性格を欠き、団体を規制する能力の全くないバラバラの個人の集積である東洋の都市とも鋭い対立を示す。中世都市は最早單なる経済団体ではなく、生活協同体ともいうべきゲマインシアフト的社会団体の次元にまで高められる。中世都市はこのような自治的、営利的な協同体たる性格に対応する合理的な社会的、政治的制度をもつている。ウェーバーはかゝる合理的な組織と、そこに醸される市民精神に、近代的な社会制度と、合理主義的なヨーロッパ精神の生誕する胚種を見ようとするのである。

このように中世都市の一般的性格を把えたウェーバーの考察はさらに進んで、ヨーロッパ中世都市を分析して、二つの都市類型を析出した。すなわち都市行政のトレーガーをメルクマールとして分たれる、イタリヤ諸都市を中心とし南仏諸都市を含んだ南欧型都市、すなわち貴族都市（Geschlechterstadt）と、アルプス以北の北欧型都市、すなわち平民都市（Plebejerstadt）の二類型である。南欧型都市は市民団体としての自治体――コンムーネ――として、成立するが、ウェーバーがそれを貴族都市と規定する所以は、かゝる都市が、本原的には都市外勢力たる貴族層[2]――都市の商人出身の擬制のそれを伴つた――を都市行政の担当者として含んでいる点にある。かゝる貴族は完全なる意

味において封建的要素ではないとしても、身分関係においてそれを脱し得ず、その生活内容はむしろ騎士一般のそれであつた。したがつてかゝる要素を都市行政のトレーガーとしてもつた場合のイタリア都市は、市民団体としては完結したものとはいゝ得ず、東洋型都市と北欧型都市の中間的な過渡的段階にあつたと見られる。

これに対して北欧型都市は自治的な市民の公共団体としてはすでに完結した姿をとつている。ウェーバーがそれを平民都市と規定する所以は、北欧型都市が商工業者を中心とした市民の個人としての結合たる誓約団体 Schwurgemeinshaft であり、都市内の個人は法的に平等であり――都市の空気は自由にすの法諺を想起せよ――個人として市政につながつている点にある。北欧都市といえども、職業上の団体たるツンフトを政治上の單位としてもつており、現実にはツンフトの指導者たる特定の一群の商工業者たとえばケルンの有名なる二十四人の富人団体 Richerzeche ニュルンベルグの極めてイタリア的色彩の濃い四十家族の都市支配があつたとしても、その特権層は市民自体の析出したものであり、またツンフト内部においてはその構成員が団体規制に関する法的な均等性と経済的自由を一応もつており、兎も角もその商人精神、営利行為に伴う合理主義は合理的な都市制度の背景となつたものであつて、南欧型の都市とは異つたカテゴリーに属するものとせねばならない。

叙上のごとく、ヨーロッパ中世都市はウェーバーの精緻な考察によつて、改治的、社会的、経済的関連において綜合的に把えられた。ドイツにおける十九世紀中葉以来の中世都市研究の中心課題の一は、都市の制度史的、法律史的研究であつて、都市制度、市民団体の法的位置の究明に精力が傾けられた。O・v・ギールケ[3]を先達とする法学者たちによつて、この分野において、多くの貴重な業蹟が挙げられた。また中世都市研究に関する今一つのグループは歴

史学派の経済学者による都市経済の歴史的研究であつた。シュモラー、ビュツヒアーの業蹟を先蹤と仰ぐ歴史学派の経済学者の段階理論は、中世都市の経済体制を都市経済なる発展段階的範疇をもつて、多様なる中世都市の経済生活を一律に律し去ろうとする嫌いがあつたとはいえ、それらの研究が中世都市の経済生活についての多くの確実なデータを提供したという学史的意義は過少評価されるべきではない。十九世紀以来のそれらの研究が、ウェーバーに汲みとられて政治的、社会的、経済的諸契機の関連において綜合的に考察せられたのである。しかしながらウェーバーの業蹟によつて、中世都市の研究は尽されたわけではない。仮りにウェーバーの体系に従うとしても、個別的研究によつて彼の類型化を一層深く掘り下げて吟味し、その類型化を補足修正することも一つの残された道である。さらにまたウェーバーの研究が上述の略説によつても明らかなごとく、都市主権のあり方から市民団体の性格を規定するという社会学的方法論によつて、社会関係構成の諸要件の関連から都市像を彫出そうとするものであつたが、それとは逆に経済的前提から社会関係を考察し、都市像を浮かびあがらせようとする研究の可能性もあると思われる。この種の業蹟の一つとしてゾンバルトの研究を数(4)えることが出来るかと思われるのであるが、ともあれ、その研究を可能にするのは豊富な個別研究の存在である。

ところでウェーバーの綜合的業蹟の現われた前後からのドイツ史学界の中世都市研究の動向の特徴は、各都市の精密な個別的研究によつて恐ろしく精密度が増したということである。それらの研究は、幾つかのグループに分ち得るかと思われるのであるが、その一つはトポグラフイ的研究である。すなわち地方誌の叙述を究極の目的とし、交通、周辺農村との関連という地域的諸條件を充分考量の中に入れた都市研究である。つぎに都市景観の成立を対象とする

歴史地理学的研究もまたそれに近いといえるであろう。[5] 第三のグループとすべきは、租税帳、人別帳の中世史料を利用しての中世都市の財政、市民の経済生活の測定、資産の分布に関する経済史学者の研究である。以上の諸研究を総括した研究は現在のところ現われていないが、現状においては、諸都市の恐ろしく多様なる様相を展開しつゝあるとしても過言ではないであろう。

以上の諸研究の中で、われわれが今注目せんとするのは、第三のグループの歴史学派の流れをくむ経済史学者の、租税帳、人別帳を利用しての統計的研究である。このグループの研究の先蹤をなしたのは、古くシェンベルクとビュッヒアーの研究であつて、チュビンゲン大学の統計学教授シェンベルクの「十四、五世紀におけるバーゼルの財政事情」(一八七九年)[6]は劃期的な意義をもつ業蹟であつた。シェンベルクの労作の学史上における意義は、中世都市の人口、財政関係の統計的事実に関して、従来信ぜられた拱樸な根拠のない数字を大幅に修正して科学的な統計操作に基ずく確実な数字を提供したことであつた。例えばアーノルドの有名な「自由都市法制史」[7]のごときも十三世紀のケルン、ウォルムスの人口数について十二万、六万というごとき数字をを推定しているが、これはその後の研究による数字の正に四、五倍である。シェンベルクの業蹟は劃期的な意義をもつたが、ビュッヒアーの批判によれば、[8] シェンベルクの研究は史料吟味の厳密と統計操作の確実によつて信憑性が大であつたにも拘わらず、史料欠除の部分についての現代統計を援用する推定に無理があつて、誤差がざん入したのであつた。

かくてシェンベルクの業蹟を批判して、一層正確度の高い数字を提供したのがビュッヒアーのフランクフルト・アム・マインについての研究であつた。[9] ビュッヒアーの研究がなされたのは極めて幸福な環境においてゞあつた。すな

わちフランクフルトでは、市の文書館に十四世紀前半から十五世紀末に至る二世紀半に及ぶ租税帳（ベーデブーフ）Bedebuch が保存されてあり、それを根拠として一世紀半に亘る年度別人口表、その職業構成、市民の資産分布についての計算が可能であつたからである。ベーデブーフは市民に課せられた租税額の表であり、貧困の故の免税者をも含んでいるから同時に人別帳でもあつたわけであるが、中世都市の徴税の対象が所得ではなくして財産そのものであつたゝめ、税額が市民の資産分布の傾斜を表現するのである。このような市民の職業別人口構成、資産分布に関する統計的数字は、中世都市の社会経済的関係の闡明に対して貴重な根拠となることはいうまでもない。

上述のシェンベルク、ビュッヒアーの研究につぎ、且つそれに倣つて、ドイツ中世都市のそれぞれについての統計的研究が続々と現われた。もちろん都市によつて史料の賦存狀態が異なり、史料の豊富、不足の差があつて、研究の精粗が分れることは止むを得ないところであるが、それらの研究の中で主なるものとしてつぎのものを挙げることが出来る。

ライン・ファルツ地方のハイデルベルク、マンハイム地区の十五世紀における人口数並びに資産統計に関するF・オイレンブルクの研究[10]、ボーデン湖畔のプレゲンツ市に関するA・ヘルボックの研究[11]、ドレスデン市に関するO・リヒターの研究[12]、アウグスブルグ市に関するF・ハルツンクの研究[13]、ゲルリッツ市に関するH・イエヒトの研究[14]等。

それらの中で、管見に入つたものゝうち最も注目すべきものはイエヒトの研究である。という理由は、イエヒトの利用し得たゲルリッツ市の文書、すなわち租税帳がフランクフルトの文書を凌駕するほど完備したもので、十五世紀中葉から十六世紀にかけての一世紀半の租税帳はそれの作成の手続きが市民自身の評価を基礎とするもので、精度に

おいて他の追随を許さなかつたこと、十五、六世紀はあたかもゲルリッツ市が際会した最も激しい経済変動の時代であり、その変動期の資産分布の動態をよく示しているからである。

さて租税帳の統計的操作によつて得られる市民の資産分布に関する上述の諸研究、ことにイエヒトのそれを利用しながら、十五、六世紀のドイツ都市の資産分布、階層分化について考察せんとするのが、本稿の主題である。(15)

註 (1) Max Weber ; Die Stadt, Grundrisz der Sozialoekonomie (Zweite vermehrte Auflage, 1925) Ⅱ Abteilung, S. 514—601.

なおマックス・ウェーバーの都市研究に関する邦文文献としては増田四郎氏の「マックス・ウェーバーの都市研究」(「西欧市民意識の形成」昭和二十四年所收)阿部勇氏「マックス・ウェーバーの中世都市論」(経済学論集第五巻第二号)がある。

(2) イタリア語にて Contadino と呼ばれる。Contado (農村)出身の意味である。

(3) Otto v. Gierke; Das deutsche Genossenschaftslehre

(4) W. Sombart ; Der moderne Kapitalismus, Bd. I, ff.180.

(5) 歴史地理学的な都市研究としては J. Kretzschmar, J. Fritz, P. J. Meier, Gerlach, Gantner. 等の業績がある。

(6) G. Schönbreg; Finanzverhältnisse der Stadt Basel im 14 und 15 Jahrhundert, Tübingen, 1879.

(7) Arnold ; Verfassungsgeschichte der deutschen Freistädte, 1854.

(8) ヒュッヒアーの批判によれば、シェンベルクの推算は十四才以下の小幼児数及び徒弟の家族員数に誤謬があるという。Bücher ; Die Bevölkerung, S. 22.

(9) K. Bücher ; Die Bevölkerung der Stadt Frankfurt a. M. im Mittelaltar, 1. Band, 1886. なおその要旨は Die Entstehung der Volkswirtschaft Bd.I 所收の Die soziale Gliederung einer mittelalterlichen Stadt によつて窺うことが出来る。

(10) F. Eulenburg ; Zur Bevölkerungs und Vermögensstatistik des 15 Jahrhunderts. Zeitschr. f. Soz. u. Wirtsch. gesch., Bd 3 (1895)

(11) A. Helbock ; Die Bevölkerung der Stadt Bregenz am Bodensee. Innsbruck 1912.

(12) O. Richter ; Zur Bevölkerngs u. Vermögensstatistik Dresdens, N. Arch. f. sächs. Gesch., 2.

(13) F. Hartung ; Die Augsburgische Vermögenssteuer und die Entwicklung der Besitzverhältnisse im 16 Jahrhundert. Schmollers Jahrb. 15 (1895)

(14) H. Jecht ; Studien zur gesellschaftlichen Struktur der mittelalterlichen Städte. Vierteljahrschr. für S. u. W. G. XIV Band (1926)

(15) 中世都市の租税表を比較する場合注意すべきことは、都市によつて通貨が異り、その換算率が変動することで、また同一都市においても、貨幣で表現された資産額は時代を異にすれば実価値を異にする。しかし同一都市における特定の年代の資産分布の傾斜を知ることは容易である。

## 資　産　統　計　表 (L=Libra　F=Florin / G=Gulden　M=Mark)

(1) **ブレゲンツ** (Helbock)

| 資産 | |
|---|---|
| 50L迄 | 19.8% |
| 1000 〃 | 77 |
| 1000以上 | 3 |

(2) **ラインフアルツ** (Eulenburg)

| | |
|---|---|
| 20G迄 | 29.5% |
| 60 〃 | 31.7 |
| 150 〃 | 21.2 |
| 300 〃 | 10.9 |
| 600 〃 | 4.8 |
| 600G以上 | 1.9 |

(3) **ドレスデン** (Richter)

| | 1488 | 1502 |
|---|---|---|
| 25F以下 | 32.2% | 46.6% |
| 25 100 | 25.6 | 23.5 |
| 100 200 | 21.8 | 16.4 |
| 200 500 | 15.1 | 10.1 |
| 500 1000 | 3.8 | 2.5 |
| 1,000以上 | 1.5 | 0.9 |

(4) **バーゼル** (Schönberg)

| | 1446 | 1453/54 | 1475/76 |
|---|---|---|---|
| 1 30F | 51.9% | 50.9% | 44.5% |
| 30 100 | 16.7 | 17.2 | 21.6 |
| 100 200 | 11.2 | 10.6 | 8.9 |
| 200 1000 | 14.8 | 14 | 17.5 |
| 1000 2000 | 2.4 | 3 | 3.4 |
| 2000以上 | 3.0 | 4.3 | 4.1 |

(5) **ミュールハウゼン** (Vetter)

| | 1418/19 | 1504/05 | 1552/53 |
|---|---|---|---|
| 0 10M | 52.27% | 46.89% | 52.65% |
| 10 50 | 30.53 | 25.15 | 18.46 |
| 50 100 | 9.72 | 15.71 | 16.08 |
| 100 500 | 7.05 | 11.71 | 12.34 |
| 500以上 | 0.44 | 0.54 | 0.47 |

(6) **アウグスブルグ** (Hartung)

| 租税納付者 | 1471 | 1498 | 1526 | 1554 |
|---|---|---|---|---|
| 無所有 | 65.4% | 43.6% | 54.1% | 53.2% |
| 10F以下 | 31.6 | 53.2 | 41.6 | 40.5 |
| 10 20 | 1.7 | 1.48 | 1.44 | 2.0 |
| 20 5 | 1.0 | 1.12 | 1.54 | 1.98 |
| 50 100 | 0.21 | 0.43 | 1.80 | 1.15 |
| 100以上 | 0.08 | 0.17 | 0.65 | 1.14 |

(7) **ゲルリッツ** (Jecht)

| 資産 | 1443 | | 1528 | | 1592 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 0……10M | 275 | 27.8% | 632 | 39% | 592 | 39.5% |
| 11……100 | 547 | 54.9 | 525 | 32.4 | 666 | 44.4 |
| 101……500 | 165 | 16.7 | 323 | 19.3 | 167 | 11.1 |
| 501……1000 | 6 | 0.6 | 77 | 4.8 | 69 | 4.6 |
| 1001……5000 | — | — | 53 | 3.3 | 6 | 0.4 |
| 5000 以上 | — | — | 10 | 0.6 | | — |

(8) **バーゼル** 1429 (Schönberg)

| 資産 | 全市民の比率 | 手工業者の比率 |
|---|---|---|
| 0……10F | 25.6% | 19% |
| 10……150 | 44 | 52.3 |
| 150……2000 | 25.4 | 27.7 |
| 2000 以上 | 5 | 1 |

(9) **フランクフルト** 1495 (Bücher)

| 資産 | 全市民 | 手工業者 |
|---|---|---|
| 20F以下 | 45.7% | 32.7% |
| 20……100 | 26.8 | 32.6 |
| 100……200 | 8.2 | 12.5 |
| 200……1000 | 12 | 19.2 |
| 1000……5000 | 4.5 | 2.8 |
| 5000 以上 | 2.8 | 0.2 |

(10) **ゲルリッツ** 1443……1592 (Jecht)

| 資産 | 1443 | | 1528 | | 1592 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 市民 | 手工業者 | 市民 | 手工業者 | 市民 | 手工業者 |
| 0……10M | 279 | 23 | 632 | 54 | 592 | 34 |
| 11……100 | 547 | 75 | 525 | 82 | 666 | 95 |
| 101……500 | 165 | 39 | 323 | 73 | 167 | 18 |
| 501……1000 | 6 | — | 77 | 18 | 69 | — |
| 1001……5000 | — | — | 53 | 7 | 6 | — |
| 5000 以上 | — | — | 10 | — | — | — |

(11) 同表（パーセンテーヂにて表わした）

| 資産 | 1443 市民 | 1443 手工業者 | 1528 市民 | 1528 手工業者 | 1592 市民 | 1592 手工業者 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 0……10M | 27.8 | 16.8 | 39 | 23.1 | 39.5 | 23.1 |
| 11……100 | 54.9 | 54.8 | 32.4 | 35 | 44.4 | 64.7 |
| 101……500 | 16.7 | 28.4 | 19.9 | 31.2 | 11.1 | 12.2 |
| 501……1000 | 0.6 | — | 4.8 | 7.7 | 4.6 | — |
| 1001……5000 | — | — | 3.3 | 3 | 0.4 | — |
| 5000 以上 | — | — | 0.6 | — | — | — |

## （二）

中世都市の経済体制が当該都市の市場のあり方によつて規定されることは、今さらいうまでもないが、本稿の主題とする市民の階層分化の問題の考察にあたつては、このことを含みながら、こゝで中世都市を大、中、小の三類型に分つことゝしよう。この三類型は都市の規模――端的には人口数に表現される――と相応するのであるが、類型化の基本的なメルクマールは市場の構造であつて、市場が局地的経済に包擁されて近距離通商を対象とするか、局地的経済の限界を破つて遠距離貿易をも対象としているか、類型化の基準となる。小、中都市は近距離通商の市場の都市、大都市は遠距離貿易の市場の都市である。前者のうち、小都市は局地的通商の主体であるが、市場が最も小規模で、経済的意味では農村の域を脱し得ない所謂農村都市 Ackerbürgerstadt とか、ケチュケの所謂微小都市 Zwer-

gstadt[1]とか呼ばれるものであつて、中都市は農村都市の痕跡を残しながらも、経済的意味においても一応中世都市として完結した姿をとつたものである。人口数でいえば小都市は一千前後以下、中都市は数千である。通常知られている都市は多くは、われわれがこゝで中都市と呼ぶ類型であつて、大都市と呼ぶべきものは意外に少いのである。

さて第一類型の小都市の場合であるが、晴夜の星の如くちりばめられたと形容され、その数を三千と推定される夥しいドイツ中世都市の大部分はこの類型に属する都市であつた。しかし従来中世都市の研究は、かゝる「都市」としての意味を充分もたないものに対しては向けられないで、より顯著な大、中都市を対象としたゝめ、余り進んでいない。ヘルボックのブレゲンツ市に関する研究は、この種の都市の研究としては稀れな例とすべきであるが、その資産分布の統計を見よう。（表(1)参照）[2]ブレゲンツ市はボーデン湖東畔の小都市で、人口五百から七百を前後し、商工業が未分化であることはもちろん、市民のすべてが農業兼営の典型的な農村都市である。その大雑把な資産統計によつても中間層が圧倒的に多数である事実が示される。これをオイレンブルグの研究の結果である、ファルツ地方の六十一ヶ所の農村地区と比較して見る。（表2参照）その資産表において二十一乃至三百グルデンの資産を中間層と見るならば、比率において六十三・八パーセントとなり、ブレゲンツの場合と著しい相似が認められる。オイレンブルグはファルツ地方における農村地区と都市地区（ハイデルベルク、ヴァインハイム、ラーデンブルグ）の比較で、都市地区における資産の増大を説いているが、[3]このことはブレゲンツ市にも妥当するであろう。ブレゲンツ市については、十七世紀に下つて、一六三四年と一六六〇年の両年度の資産統計があるが、それらの年は彼の三十年戦争当時とその直後にあたる。ブレゲンツ市は戦争による好影響を受け、その結果として富が増殖され、主として上層部に集中

し、資産の絶対額に開きを大きくするが、市民の階層間の数の比率は本質的には変らない。したがつて中間層の数の優勢という資産分布のカーブはブレゲンツが農村都市たる限りにおいて恒常的なものであり、また農村都市一般の階層分化の型を打出していると思われる。

表(3)はリヒターの研究の結果であるドレスデンの一四八八年と一五〇二年の資産統計である。ドレスデン市はヴェルテン地方の中心都市で、十五世紀における人口数は三千から四千を前後し、中都市というよりも、小都市との中間的な都市である。表において、二十五フロリン以下を貧困者、二十五フロリン乃至五百フロリンを中間層と見るならば、両年度において、中間層はそれぞれ六十二・五パーセント、五十パーセントを占め、こゝでも中間層の優勢という現象が見られる。

以上のごとく、小都市における資産分布の型は中間層の優勢ということであつたが、ビュッヒアーはフランクフルトについても、中間層の優勢、非納税者及び大富裕者数の小数という事実を指摘している。(4) フランクフルトは十五世紀における人口数は七千乃至一万を前後し、典型的な中都市かと思わるのであるが、そのフランクフルトについてもビュッヒアーはその事実を指適するのである。そして彼は進んで極貧者の稀少を主張する。フラクンフルト市の租税は二種類から成り、財産税 (Bede) と戸数割 (Herdschilling) であるが、前者はある線に免税点が引かれ、後者は免税なしの均等税である。(5) ビュッヒアーに従えば、免税点がすでに最低の生活需要を満すに足るだけの線に引かれ、その免税者といえども十二シリングの戸数割を納付する。これらの免税者がルンペン化した極貧者でないことの証拠として、ビュッヒアーは、非納税者の多くが寺院に地租を納めている事実から、彼等の多くが自己の家屋所有者であ

ることを推定し、また一四〇六年の表によつて、フランクフルト市中の一地区たるOberstadtの非納税者、すなわち戸数割のみの納付者四百十一人中、家屋または土地所有者が五割弱であつたことをも指摘する。(6)

フランクフルトにおける市民、ことに手工業者において中間層が優勢であり、下層に属するものといえどもルンペン化した存在でないことの理由として考えられることは、手工業、商業が専業ではなくして、その殆んどすべてについて、兼業としての農業があつた事実である。一四四〇年のフランクフルトの職業別人口構成の統計において、ビュッヒアーは、原始産業従事者を十八・三パーセントと算定したが、その際、彼はもし兼業を含めるならば、すべての市民が農業に関連したと見ざるを得ないという。尤もこゝにいう農業は、果樹園、牧畜、養蜂等の商品生産の意味の多いものを含むことはもちろんである。十五世紀におけるフランクフルトにおける農業が如何に一般的であるかを立証するため、ビュッヒアーが挙げる事情にはさらにつぎのものがある。すなわちフランクフルト市中の一部Sachsenhauser Berg（地積は三十フーフェ、すなわち九百モルゲン）が一三八九年まで全山樹木に蔽われていたのが、開墾されて全山ブドー畑と化した事実、市参事会の決議事項の三分の二が農業に関するものであつた事実、十五世紀のベーデの課税対象としての農業所有、農業器具――ブドー圧搾機等――についての規定が詳細を極めた事実等である。(7)ビュッヒアーの立証によつてフランクフルトは十五世紀において、なお農村都市の痕跡を残していることは明らかである。フランクフルトの都市風景は、恐らくフライタークが「ドイツの過去」(8)において描く村落に似たものであつたろう。その中間層の優勢は、市民の多くが本来的な都市人となつていなかつたことに根拠をもつていることは、上述の小都市の資産統計との比較によつて、また農村的性格をより強く脱した後述の典型的な中都市の資産統計における

中間層の劣勢化との比較によつても明らかである。

第二類型の中都市の例としては十五世紀におけるベーゼル市（十六世紀以降になるとベーゼルは最早こゝにいう中都市ではない）、この都市については前述のシェンベルクの詳細な研究がある。つぎにフェッターの研究した中部ドイツのミュールハウゼン市の場合。人口はいずれも一万内外である。両市の資産統計を見る（両市の場合は税額から資産額を推算したものである——表(4)(5)参照）ベーゼルの場合の三十フロリン以下、ミュールハウゼンの十マルク以下の資産を貧困者、無資産者と見るならば、両都市ともそれが約五十パーセントを占めていることは、第一類型の小都市の場合と可成り異る。またベーゼルの場合の三十乃至二百フロリン、ミュールハウゼンの場合の十乃至五十マルクの資産を中間層と見做すならば、それが約二十乃至二十五パーセントにすぎないこと、またベーゼルの二百フロリン、ミュールハウゼンの五十マルクの資産以上の富裕者層の開きが拡大していることも、小都市と著しく異つている。このように、中都市における市民の経済的位置のデイファレンシエーションの拡大は明らかであるが、注意すべきことはベーゼルにおいて約三十年、ミュールハウゼンにおいては十六世紀中葉に至るまでの約百三十年の資産分布において、本質的な変化を示していないことである。このことは両都市とも地域経済の主体としての発展の限界に達したことを物語るものであつて、そのことは、遠距離貿易の主体となり、国際的な意味をもつた第三類型の大都市との比較によつて明らかである。なおベーゼルはこの時代をすぎて十六世紀以降になると、西南ドイツ工業の一中心として、フッガー時代の華となり、面目を改めるのである。

つぎに第三類型の大都市に移ると、その例の一つがアウグスブルグである。アウグスブルグがシュバーベン地方の

中心都市で、中世末期において、その貿易はドイツとイタリアをつなぎ、経済活動の旺盛さにおいてニュルンベルクにつぐ南独の代表的都市となつたことは周知の通りである。その人口は十五世紀後半において一万八千を超えて、全欧的な標準から見ても第一級の都市のあつた。(9) ハルツングによつて与えられた税額表（他の表の如く資産統計ではない）は一四七一年から一五五四年に至る八十余年間の変化を示しているが、こゝにとり扱われている十五世紀後半から十六世紀にかけての時代はアウグスブルグの経済変動の最も激しかつた時代で、この時期にアウグスブルグは南独の支配的位置に達したのであつた。

表で見ると、一四七一年の最下層たる無所有者で免税のものが実に六十五パーセントを占めている。この現象は前述の小都市と中都市の比較によつて認めることの出来た貧困者の漸増が、大都市に至つて、一層顯著に現われたものと見ることが出来る。ところでこの数がアウグスブルグ躍進の最初の時期である一四九八年に至る三十年間に二十パーセント減少している。尤もこの数はその後三十年を経た一五二六年に五十四パーセント、さらに二十年を経た一五五四年に五十三パーセントと約十パーセント逆転しているが、兎も角もアウグスブルグの経済発展の最初の時期に最下層が若干減少したことは、彼等のあるものが経済発展に参与し得たものと見ることが出来るであろう。もし無所有の上の十フロリン以下の納税者をも貧困者と見做して加算すると、下層者の比率は実に九十数パーセントとなる。十フロリン以下の納税者の三十乃至五十パーセントには中間層も含まれていると思われるが、兎も角も中間層が弱体であることは明らかに看取される。その反面において富裕者層は着実に増加している。百フロリン以上の納税者を富裕者とするならば、表の示す百八十年間に〇・〇八パーセントから一・一四パーセントと実に十八倍という大幅の増加を示し

ている。

この十六世紀中葉という時代は、アウグスブルグの最盛期の繁栄を代表する彼のフッガー家、ウェルザー家などの巨大な富が成長し初める時期で、フッガー家では創業の士ヤコブの活躍する時代なのであるが、この時代における富裕者層の激増、他方において無所有の貧困者の増加の現象を、シュモラーはベルケント工業の繁栄と結びつけて説明する。[10] ベルケントは麻と木綿の交織布で、麻は南独の自給品であるが、主原料たる木綿はレバントの生産物でイタリア商人を介して南独に輸入せられ、その製品も十六、七世紀の主要な国際貿易の商品の一つであつた。このように原料も製品も遠距離貿易のすぐれた商品であるから、その商業は局地経済のそれとは面目を異にし、大商人の出現は当然である。また工業の生産規模も拡大して、商人の前貸制度による工業支配、手工業の生産過程の分業化、各工程における補助労働者の増加といつた一連の現象が現われる。アウグスブルグにおける富裕者層とその対極としての無所有の貧困者層の増加は、このような経済変動、生産様式の変化に基ずく大商人、工業企業者の富の蓄積、他方における補助労働者の激増を示すものに他ならない。つぎに説こうとするゲルリッツの場合はこのような変動期における階層分化の姿を一層鮮明に示している。

ゲルリッツはシレジアの上ラウジッツにある都市で、エルベ河畔のドレスデンとブレスラウをつなぐ街路と、オーデル河畔のフランクフルトと南方のリンツをつなぐ交通路との交叉点に位し、その恵まれた地理的位置によつて輸出工業、遠距離通商の市場をもつ都市として栄えた。一四四三年当時の人口は五千五百（その数はその後急増する）[11] で、人口の点ではドイツの第一級の都市といえないが、概して人口数の少いオスト・エルベの都市としては頭抜けた都市

の一であり、毛織物の輸出工業と國際通商の市場の都市として性格を可成り鮮明にもつている都市であつた。

このゲルリッツの資産分布と社会構成については前述のイエヒトのすぐれた研究がある。イエヒトの研究は史料の点で甚だ恵まれている。すなわちゲルリッツの中世史料はフランクフルトのそれと比肩し得るほど整備されたものであり、一世紀半の長期に亘つての動態を把え得る点ではビュッヒアーの取扱つたフランクフルトと類似し、市民の階層分化の観点からすれば、最も重要な職業別人口の資産分布の動態を窺い得る点ではフランクフルトの場合よりもすぐれているのである。しかもイエヒトにしたがえば、ゲルリッツの租税表は、その作成の手続から見て、他都市のそれよりもはるかに正確に把えられているという。たとえば一四四三年の租税表は、市参事会と市民代表が租税のための委員会を組織し、委員会が全市民の資産を評価査定し、それに基ずいて課税されたからである。[12] その租税表から市民の資産を推算し、その分布の状態を統計的に示したのが、表(7)である。同資産統計は一四四三年から一五九二年に至る一世紀半の三時点における資産分布の動態を示しているが、このように一世紀半という長期に亘る市民の資産を把える場合、ゲルリッツのこの時期のように経済変動の極めて著しい時代には、それぞれの時点で把えられた資産表が如何に正確であつても、それの比較には貨幣価値の変動を考量に入れねばならないのである。

表(7)に現われた一四四三年、一五二八年、一五九二年の三つの年代はそれぞれゲルリッツの経済変動の分岐点であつた。すなわち一四四三年は遠距離貿易の華々しい経済活動の初まる直前、一五二八年は経済活動の最高潮期、一五二八年は後述のごとき理由による経済活動の沈滞した時代である。さて一四四三年の表について、十マルク以下の資産を貧困者、十一乃至五百マルクを中間層、五百マルク以上の資産を富裕者と見るならば、中間層の合計は七十一・

六パーセントとなり、その資産分布の型は、中間層の圧倒的多数という前述の小都市の類型に属することを示している。つぎに一五二八年度に移ると、前者と著しい相違が認めらる。一四四三年から一五二八年に至る八十五年間はゲルリッツの激しい変動期で、毛織物生産の輸出工業の躍進により、その市場は国際的な存在となり、ポーランド、ボヘミヤ、ハンガリヤ、ジーベンビュルゲンから更にバルカン地方をも取引範囲に入れた。[13] 一五二八年はゲルリッツの経済活動の絶頂期で、一四四三年当時五千五百であつた人口数も三千五百の純増加で九千に達した。実に六割の増加である。一九二八年の資産純計における中間層の合計は五十七パーセントで、一四四三年と比較して約二十パーセント、百三十六人増加しているが、全市民に対する比較において十九・九パーセントという大幅に減少している。しかし中間層の変化よりも著しいのは、下層と上層の変化である。前者の貧困者について見ると、一四四三年の二十七・八パーセントが一五二八年の三十・九パーセントと十一パーセント増加し、絶対数においては、二・三倍となつている。人口の増加が主としてこの層に現われていることは明らかで、後述のごとき毛織物工業の生産様式の変化によつて、補助労働者の激増したことを物語るものである。

つぎに後者の富裕者の変化について見ると、一四四三年の五百マルク以上の資産者六、比率で〇・六パーセント、千マルク以上の資産者ゼロであつたのが、一五二八年には富裕者層は三階段に分れ、合計すれば百四十人、八・六パーセント、そのうち五千マルク以上の資産者十となつて、富裕者層の合計の増加率は実に十六倍である。貨幣価値の下落を考量に入れるとしても、兎も角著しい増加で、しかも五千マルク以上の資産者十を数えていることは注目しなければならない。五千マルクといえば当時における巨大な資産で、遠距離貿易で富を増殖した商人が、前貸資本家とし

て手工業者を従属的地位に置いて躍進した事情を剰すところなく示しているのである。

つぎに一五九二年に移る。ゲルリッツは十六世紀後半に盛期を過ぎて、一五九二年はすでに沈滞期に入つている。すなわちゲルリッツが生命と頼む毛織物がこの頃東ドイツにおける支配的な国際商品たる位置を亜麻布（Leinwand）とバルケント綾織に譲り、しかもその取扱を南独商人の手に握られて、ゲルリッツの国際的取引と輸出工業は衰頽せざるを得なかつた。バルケント取引ではアウグスブルグとウルムの商人の活動が活潑となり、国際通商では優位を誇つたレゲンスブルグの商人をも圧倒し去つたのである。[12] この衰頽期の一五九二年の資産統計を見ると、目立つことは富裕者の激減であつて、千マルク以上の資産は六十四年前の最盛期の六十三から六という一割にまで落ちこんでおり、五千マルク以上の資産に至つては、六十四年前の十に対してゼロという惨憺たる状態である。中世末期における繊維製品の嗜好の変遷は激しく、繊維工業の盛衰は免れない運命であるが、ゲルリッツの悲況はこのように大資産の没落という点にはつきりと現われている。表に現われた一世紀半の間の貨幣価値の下落は約五十パーセントと推定せられ、一五九二年の千マルクの資産は一四四三年の五百マルクの資産とほゞ等額と見られるから、富裕者層の数はゲルリッツの経済発展以前の一四四三年当時の状態に戻つたことゝなるのである。

ところで注意すべきことは、一五九二年の貧困者層が、その絶対数においても比率においても一五二八年当時と不変で、したがつて資産分布のカーヴそれ自体は一四四三年当時に戻らないことである。すなわちゲルリッツの一時代の繁栄は、そのあとに貧困者の増加、補助労働者の職なき惨憺たる状態を残して行つたのである。

以上、小、中、大の三類型の諸都市の資産分布、階層分化について見て来たのであるが、それを総括するならばつ

ぎの如くである。小都市の資産分布において見られた特徴は中間層の圧倒的多数という現象であつた。それが中都市になると中間層は減少して、上層と下層が増加する。しかしその変化は漸層的であつて、質的な変化ではないと思われる。しかし大都市になると、富裕者と貧困者の上下の層の増大が鋭くなつて、その差は量的なものでなく、質的なものとなつて、大都市独自の経済的差等、階層分化を示すものと思われるのである。

註 (1) ケチュケは都市の人口増加について、交通技術の要素を重視するのであるが、人口数を基礎とした都市類型として、中世末期の全ヨーロッパ都市についてつぎのような分類を試みている。

一、大都市。人口五万以上の第一級の都市。フロレンス、ミラノ、ヂエノア、バルセロナがこれにあたり、ケルン、ロンドンがこれに近い。ビザンツ、ヴエネチア、パレルモ、パリは人口十万を越えた世界都市と呼ぶべきである。

二、中都市。イ、大型中都市、人口二万乃至四、五万。ボロニア、パヅア、ルーアン、ブリユセル、ニユルンベルク等これに属する。ロ、小型中都市、人口六千乃至二万。イープル、アントワープ、バーゼル、ガン、フランクフルト等。

三、小都市。人口五千位。そのうち人口二千以下のものは微小都市で、眞に都市的な性格を具えていない。

中世都市の人口問題については鈴木成高氏著「封建社会の研究」後篇。なお同著には遠距離通商の概念について卓見がある。

(2) 本表の作成はイエヒトの研究に負うところが多い。

(3) 三都市の一納税者当り平均資産百三十二グルデンに対し、最小の農村部落のそれが七十七グルデンであつて、その比は一・七対一である。 Eulenburg; a. a. O. S. 444—7.

(4) Bücher; Die Entstehung, S. 430.

(5) フランクフルトにおけるベーデは動産、不動産のいずれについても課せらる。税率は動産に一・三パーセント、不動産に七パーセント。可成り高率である。免税点は男子一人につき馬一頭、女子一人につき牛一頭、穀物、酒の自家消費分

マグサ、乾ワラの一ケ年貯蔵分。すなわち生活の最低部分は免税であつた。戸数割は十二シリング（四マルク二十プェニヒにあたる）。中世都市のベーデは財産税で、近代の所得税と異ることは注意を要する。

(6) Bücher; Die Entstehung, S. 434 ff. Die Bevölkerung, S. 259.

(7) ibid

(8) G. Freytag; Deutsche Vergangenheit, Bd. 2, S. 119 ff.

(9) Die Bevölkerung des Mittelalters, in H. Wörterbuch der Staatsw. Bd. 4, Vierte Auflage, 1924.

(10) Jecht; a. a. O. S. 65.

(11) a. a. O. S. 68.

(12) また一五二八年の場合はフェルヂナンド一世帝のトルコ税賦課を機会として市民自ら査定したものである。（a. a. O. S. 66）

(13) F. Rörig; Mittelalterliche Weltwirtschaft, 1933, S. 11.

(14) a. a. O. S. 18 ff.

## （三）

以上、中世都市の市民全般の階層分化について見て来た。ところで、市民の階層分化という観点からすれば、ツンフト的手工業者の存在がどのような意味をもつたかというのが、つぎの問題である。

中世後期において、手工業者が都市人口の中核体を形成していたことは、いうまでもないが、租税帳、人別帳を資料とする統計的研究において、手工業者の人口比率は如何に算定されているであろうか。しかしこの目的のための、

すなわち職業別人口構成を算定するための資料は極めて貧弱で、租税帳、人別帳が職種を示す場合は稀れである。ビュッヒアーもフランクフルトのあの整備した租税帳によつて、職業別人口構成を算定し得るのは、一四四〇年の部分のみであることを嘆じている。[1] しかもそこで得られる手工業者の人口は手工業の専業者ではなく、その多くは少くも農業を兼業して、その農業が彼等の生計の最低部分を支えて、手工業はむしろ現金収入のための副業的なものが多いというのである。この状態は、わが国現代の農村におけるいわゆる兼業農家の大幅の存在と類似しているのであるが、このような場合、兼業の業種のいずれを主たる生業と見るべきかについては常に困難が伴う。ビュッヒアーはもちろん農業兼営者を含めての手工業者の人口比率を一四四〇年度において五十八・三パーセントと算定した。[2] オイレンブルグはこれより一世紀後の一五八八年のハイデルベルクの場合について四十七・七パーセントの数を出している。[3] 中世の工業生産力を低く評価するゾンベルトは、手工業者の数そのものをも低く評価すべきことを主張して、パリの如き大都市の場合における手工業者の人口比率を二十五乃至三十パーセントと推定するのであるが、[4] 中都市以上の都市において、兼業を含めた場合、手工業の人口比率を五割内外と推定することは必ずしも不当ではないと思われる。

さらに手工業者の職種別の人口構成を算定する場合も亦容易ではない。ツンフトのメンバーが必ずしもその職種の従事者ではないからである。一体人口一千に満たない農村都市において、職種別に組織されたツンフトの存在は、それが関連する職種をも含んだとしても、到底考えることは出来ないのであるが、[5] 中都市以上においてさえ、純粋な職種別ツンフトの存在を考えることは困難であつて、ビュッヒアーの主張するごとく、ツンフトの輪廓は極めて不明確なものであつた。ビュッヒアーはツンフトが異種の手工業者を包擁することはもちろん、全く手工業者ならざるもの

を含むことも珍らしくなかつたことを指摘している。[6] このような事情は手工業者の計数的研究を困難ならしめ、その結果を推定の域にとゞまらせるものであることは注意を要する。

さて、手工業者の資産分布が、一般市民のそれとの対比において、どのようなものとなるかについて、ビュッヒアーの算定した一四九五年のフランクフルトと、シェンベルクの算出した一四二九年のバーゼルの統計は表(8)、(9)のごとくである。これによると、手工業者の間の富裕者層と貧困者の資産の開きが、一般市民のそれと比較して少なく、中間層がやゝ優勢で、要するに資産分布の傾斜が緩漫である。この事実から、手工業者の存在が、市民の階層分化の傾向に対して阻止的な役割を果していることを、認めることが出来る。

イエヒトはゲルリッツにおいても、ツンフト的手工業者が同様の役割を果していることを指摘し、このような現象は、社会集団の階層分化が内部小集団の存在によつて緩和される、というジンメルの社会学の原理[7]によつて裏付けられると説いている。すなわちイエヒトは「社会分化の発展の傾向は、その個々の成員が大なる社会集団の内部で、個々の下部結合(Untergruppen)に分割されることによつて抑制され、その個々の下部結合の性格が全集団の社会構造を規定する。都市共同社会においては、特定の職業を中心として結成されたギルドやツンフトがそれに当る[8]」というのである。この事実は、ツンフト的手工業の常に抑制された生産規模から考え、また生計(Nahrung)の平等性、相互扶助、機会の均等等を精神的支柱とし、個人の自由な営利を抑制したツンフトの性格、その技術的前提から推して、一応妥当と見なければならない。

それにしても、表(9)のフランクフルトの統計でも知られる通り、手工業者の資産状態も可成りの階層に分化してい

ることは事実である。オイレンブルクがハイデルベルク市の研究において、手工業者の平均資産を計算して、異つた職種のツンフトの手工業者の平均資産の最高、最低の間に三倍の開きがあることを指摘している。[9] さらに附け加えるならば、シェンベルクが一四二九年のバーゼル市の場合について可成り詳細な算定をしているが、これも同様の結果である。[10] これらによつて、ツンフト的手工業者の資産状態に均等性がないことは、明らかである。しかしながら、こゝで問題としなければならないのは、異れる職種の手工業者の間における資産の開きではなくて、同一職種の手工業者の間の資産分布の傾斜である。

これについて、非常に良い資料を提供するのが、ゲルリッツの例である。ゲルリッツの場合は、フランクフルトやハイデルベルクやバーゼルについては、せいぜいある特定年度における職業別資産表が得られるだけであるのに対して、一世紀半の期間にわたつて、その変動の状態を検出し得ることは、前述の市民一般の資産統計と同様である。イエヒトの算定した統計は表(10)、(11)である。これは輸出工業たる毛織物職人と一般市民とを比較したものであつて、(10)は絶対数、(11)はそのパーセンテージを出したものである。三つの年度については、一四四三年がゲルリッツの経済発展以前、一五二八年が経済発展の最高潮期、一五九二年が衰頽期であることは、前述の通りである。

三つの年度を比較すると、極めて激しい変動が認められる。一四四三年において、中部市型の構成を示した手工業者の資産分布が、一五二八年にはむしろ一般市民のそれよりも、傾斜が鋭くなつたことが認められる。一五二八年においては、一千マルク乃至五千マルクの資産者が七人、五百マルク以上を通算すると二十五人となる。このころにおける五百マルク以上の資産を擁する手工業者は、最早古い型の職人ではなく、恐らく自ら織機に向つて手を下す職人

ではなくて、事業の経営管理に当るものであつた、とイエヒトは推定し、その推定を裏書する事実として、これらの人たちの住居が仕事場と分離していたという現象を挙げる。[11] この現象は、その生活様式が明らかに仕事場生産(Werkstattproduktion)であつて、経営者が屢々商人の前貸資本に包擁されながら、他方において補助労働者を使用する企業家的生産者であつたと考えられる。このような企業家的、経営者的生産者の出現、換言すれば、マニュファクチュア的経営形態の導入が、手工業者の階層分化を促進し、ツンフトのゲマインド的性格を破壊し去ることは、明らかである。

それと共に、手工業者の階層分化を促進する今一つの事実として、マニュファクチュア的経営方式の導入によつて初まる手工業労働の分化、すなわち分業が考えられねばならない。中世のツンフト的手工業における労働分化が、鍛冶職、裁縫師、大工職というような製品の品目別による、いわゆる分労(Arbeitsteilung)であることは周知の通りであるが、マニュファクチュア様式の段階に入つて、労働工程による近代的ないわゆる分業(Arbeitszerlegung)が出現する。[12] 毛織物生産のような規模の大きい国際商品については、それが最も早く出現し、最も多種類であることは当然である。この点について、ゾンベルトはいう。

「中世諸都市の職業構成においては、工業関係の専門化の限度は、工業的発展の限度によつて規定された。すなわち工業関係の専門化の限度は工業的発展の限度によつて規定された。工業生産の精密化の進展は、独立の職業にまで凝結せんとする個々の特種作業の分離の増大に表現される。したがつて職業名称の多寡は、ある都市の工業生活が到達した発展の程度の認識に対して、ほゞ確実なる尺度を提供する。[13]」

ゾンベルトは、分業の程度、職業の数が工業発展のバロメーターとなるというのである。中世都市における独立せる職業の数をビュッヒアーは一四四〇年において百九十一[14]、オイレンブルクはハイデルベルクについて百三[15]、シェンベルクはバーゼルについて百二十を数えている[16]。ゾンベルトは中世工業の発展の極に達したパリにおいて、四百四十八の職業を見出すという[17]。以上はツンフト的手工業を中心とする場合であるが、マニュファクチュア的生産様式の導入と共に、分業が一層多岐にわたることは当然である。

たとえば毛織物業における、洗毛、梳毛、紡毛、織工、染織、仕上というような労働工程による分業が進行し、数多くの職種が成立した場合、同一種類の職種の従事者の間には、通常、資産の大きな開きは生じ得ないものと思われる。何となれば、手工業という労働組織の性質、その技術的前提から考えて、同一工程の個々の経営は平均的な規模以上に出るには限度があるし、またその限度以上に出ても大した利得を生み得ない、と思われるからである。しかるに異つた業種の、或は異つた工程の職種の手工業生産の間では、他種の生産者の平均的規模をはるかに凌いだ経営が生れることは決して珍らしくない。織物業についていえば、その分業の部門間に経営規模の差が生まれ、殊にその経営のある部門に、たとえば仕事場生産の経営主というような企業的要素が入れば、大規模な経営単位が出現することが考えられる。そこに、同じく手工業者といえども、資産の蓄積に差等が生じて、資産分布の傾斜が鋭くなり、階層分裂激化の可能性が大となる。

以上を総括すると、つぎのようになる。中世都市の手工業は、ツンフト的経営にある限りにおいて、ゲマインド的性質を保持して、市民の社会的分化を阻止することは、事実である。しかしツンフト的手工業の内部において、殊に

異つた業種間に経済的差等がないわけではないし、しかも手工業経営の質的変化、すなわちマニュファクチュア的生産の導入、工業の精密化にしたがつて、労働の分化が進行し、異つた工程の職種間の経営規模の差が生じ、手工業者間の経済的差等が激化する。したがつて、この場合には、手工業は市民の社会的分化を反つて促進する役割を演ずることゝなる。

註

(1) Bücher; Die Bevölkerung, S. 210 ff.

(2) 納税義務者二千四百人中、独立職業従事者は一千八百人である。その独立職業者一千八百人中、手工業者は一千五十人、五十八・三パーセントである。なお原始産業従事者は三百三十人、十八・三パーセントである。Bücher, Die Entstehung, S. 425.

(3)(4) Sombart; a. a. O. Bd. I, S. 251.

(5) 鈴木成高氏前掲書五一六頁参照。

(6) Bücher; Die Entstehung, S. 422.

(7) Simmel; Soziologie.

(8) Jecht; a. a. O. S. 71.

(9) Eulenburg; a. a. O. S. 454 ff.

(10) Schönberg; a. a. O. S. 184 ff.

(11) Jecht; a.a. O. S. 76.

(12) 分業については Bücher; Die Entstehung, VIII Kap. Die Ardeitsteilung 参照。

(13) Sombart; a. a. O. Bd. I, S. 264.
(14) Bücher Die Bevölkerung, S. 227.
(15)(16)(17) Sombart; a. a. O. Bd. I, 266 ff. 参照。

## (四)

以上、われわれは中世末期、主として十五、六世紀におけるドイツ都市を、小、中、大都市の三類型に分つて、それぞれの都市類型の市民の資産分布、階層分化について、考察して来た。その結果は、小都市において圧倒的に優勢であつた中間層は、中、大都市に至るにしたがつて減少して、富裕者層と貧困者層が増大し、資産分布の傾斜が鋭くなる、ということであつた。オイレンブルグが十五世紀のライン・ファルツのマンハイム・ハイデルベルク地区の都市部（すなわちハイデルベルグ、ヴァインハイム、ラーデンブルクの三都市）農村都市を含めた六十一ヶ所の地域の資産分布の実証的研究において、社会集団の規模の大なるにしたがつて、一人当りの資産が増大すること、今一つ中間層が増大すること——彼にあつては、小規模社会集団における富の偏在という結論となるのであるが——を指摘していることは、[1]都市の各類型の間においてもまた事実なのである。

ところで、前にわれわれが指摘したように、中間層の減少という事実が、小都市と中都市の差にあらわれる場合は、漸層的であつたのに対して、中都市と大都市の差にあらわれる場合はむしろ飛躍的というべきであつて、前者とは本質的に異るものであるように考えられたのであつた。その本質的な相違は果して何によるのであろうか。われわれは

それを都市の市場の性格と結びつけて考察したいのである。小都市はもとより、中都市の市場といえども局地的な性格のものであつて、限られた地域性の枠内における周辺農村との商品交換を、その本質的な機能としたものであつた。小都市、中都市の規模の大小――端的にはそれが人口に表現される――は地域的経済の包擁力の差であつた。地域的経済の主体たる限りにおいて、両類型の都市の市場の間には、量的な差はあつても、質的な相違はない。したがつて、市場の性格を形成する商業や手工業のあり方によつて規定される都市の社会構造については、両類型の都市の間には質的な相違はあり得ないと思われるのである。中間層の減少という現象について、小、中都市の間に飛躍的な変化がないことは当然である。

これに対して、こゝにいう大都市の類型に属する諸都市における、富裕者層と貧困者層の飛躍的な増大、したがつて全市民との比率における中間層の減少は、大都市が遠距離貿易の市場であつたことによつて、理解される。遠距離貿易、国際通商と局地的な近距離通商との差は、量的なものではなくして、質的な構造上の相違である。遠距離貿易の国際商品を対象とする手工業生産は、近距離通商の場合のツンフト的手工業生産とは構造上の変化を遂げている。すなわち、家内生産 Heimprdukẗion の域を離れて、他ならぬ仕事場生産、商人の前貸制度と結びついたマニュファクチュア生産様式の開始である。またツンフト的手工業者とカテゴリーを異にした補助労働者の発生である。このような商業、手工業のあり方に規定された大都市の社会一般が、前記二類型の社会一般と構造上の相違を示すことは当然である。われわれは都市の社会構造の変化が、当該都市の市場の構造変化に伴つて、如何に鋭敏に現われるかについて、ゲルリッツ等の例を通して考察した。ゲルリッツの場合より推して、全ヨーロッパ的な展望において、遠距

離貿易の市場であつたイタリヤ諸都市、フランドル諸都市、さらに近年ドイツ中世経済史学者の主たる研究対象とされたハンザ諸都市についても同様な社会構造が想定されるように思われる。

近年レーリッヒ等によつて、中世の経済体制一般を、世界経済の名の下に広域経済圏と考える見解が主張されていることは、人の知るごとくである。(2) レーリッヒの見解は中世の全都市について、国際貿易の契機を認めようとするものであつて、われわれはその主張が余りに大胆であることに必ずしも賛し得ないが、しかしレーリッヒが主たる根拠としたハンザ諸都市、その他特定の都市群について、意外に活潑な経済活動が行われたことは、争えない事実であつた。それらの都市群において、市民の旺盛な営利精神が醞釀し、大規模な富が蓄積されたことは当然の結果である。他方において手工業生産の様式変化に伴う、無所有の補助労働者の増大。中世の国際貿易は景気変動を免れ得なかつた。商品に対する嗜好の変化、資材供給の不円滑に屢次見舞われるからである。免れ得なかつた経済不況によつて最も深刻な打撃を蒙るのは無所有の補助労働者である。このことをゲルリッツの例を通して考察した。そこに補助労働者の失業、ルンペン化、それに引きつゞくさまざまの社会悪の横行を想像出来よう。かゝる社会関係は一言にしていえば近代的なそれである。しかし中世末期の都市における近代的な社会関係は、そのまゝ近代に引きつがれることはなく、国民経済の成立、重商業主義的国際貿易の出現に伴う、中世都市の没落によつて、一応解消したことはいうまでもない。

註 (1) 第二章註(3)参照。
(2) レーリッヒの前掲書参照。